

# これより大いなる愛はなし —荻野吟子 医師への誓い—

(株)日本設備工業新聞社  
代表取締役社長 高倉克也

医学校に男装して通った。髪を短く切り、はかま姿で高下駄を履く。男子学生の嘲笑といじめにも耐え抜いた。それなのに医師試験を受けることさえできない。女性は前例がないの一点張りだ。

のちに日本初の公認女性医師となる荻野吟子(1851—1913)は不当な仕打ちに憤慨し、失望し、働いた。内務省に請願書を出しても即座に却下された。それでもあきらめるわけにはいかない。挫けなければチャンスはあるはずだ。最後の手段として外国に渡り、資格を取るという道もある。

医師を夢見てすでに10年以上の月日が流れていた。吟子は「女医になる。きっと女医になってやる」と自分自身に誓った。

## 人と違うことを成し遂げる

吟子は現在の埼玉県熊谷市俵瀬の裕福な名主の五女として生まれた。末娘で本名はぎん。幼い頃から聡明で勉強好きだった。

17歳で豪農の稲村家の長男に嫁ぐ。ところが夫から性感染症である淋病をうつされて離婚する。生死をさまようほどの重病となり、上京して大学東校とうこう(東京大学医学部)の付属病院に約2年間にわたって入院を余儀なくされた。

治療にあたった医師はすべて男性だった。男性に下半身を晒して診察されるという屈辱的な体験を強いられる。吟子は羞恥に苦しむ女性たちを救いたいと医師を志す。後年「婦人科の病気を男子の医者<sup>いし</sup>に診察してもらうつらさから女医の必要

性を痛感せずにおられませんでした」と語っている。

向学心に燃えて24歳のとき新設の東京女子高等師範学校(お茶の水女子大学)を受験し、難関を突破して晴れの一期生となる。成績優秀

で寄宿舎の寮長を務めた。4年間を順調に過ごし、首席で卒業すると新しい時代の女性として本名のぎんから吟子に改名する。同校で「学問というものが単に知るということではなく、疑うということから始まることを知った」と回想している。

卒業に際して吟子は恩師の永井久一郎教授に医師をめざしていることを打ち明けた。彼女の力いしくろただのりになると永井は医学界の重鎮である石黒忠恵を紹介する。のちに陸軍軍医総監や日本赤十字社の社長となる石黒は吟子の並々ならぬ熱意に打たれて知人の宮内省侍医が経営する私立医学校・好寿院に吟子の入学を依頼し、特別に許可された。

現在の秋葉原にあった好寿院に当然のことながら女性ひとりもいなかった。吟子は女性と侮られないように男装して通学する。豪商の高島嘉右衛門家など家庭教師をいくつも掛け持ちして学費



荻野吟子

を捻出した。吟子は「人と同じような生活や心を求めて人々と違うことを成し遂げられるわけではない。これでいいのだ」と自分に言い聴かせた。

男子学生のいじめも長くつづかなかつた。吟子の成績が抜群だったからだ。3年間の課程を修了し、希望に胸を膨らませて卒業する。

### 女性の地位を認めているのは

しかし医師への希望の光はたちまち掻き消された。医術開業試験の受験申請書を東京府に提出したところ受理されず、翌年も却下された。埼玉でも結果はおなじだった。これまで公認女性医師は皆無で受験の前例がない。内務省衛生局に問いただすとそんな回答が返ってきた。

窮地に陥った吟子を石黒忠恵や高島嘉右衛門が支援する。石黒は内務省衛生局長の長与専齋と会って「女が医者になってはいけないという条文があるか。ない以上は受けさせて及第すれば開業させてよいではないか。女がいけないなら『女は医者になるべからず』と書き入れておくべきだ」と詰め寄った。吟子と支援者の再三の申し入れによって1884年、女性の受験がついに認められた。

さっそく同年9月の医術開業試験前期試験を他の3名の女性と受験し、吟子のみ合格。翌年3月の後期試験でも132名が受験して合格者は24名という狭き門を突破した。医師を志して15年目に悲願を達成する。父は以前に亡くなっており、応援してくれた母も後期試験の前月に失った。

34歳で日本初の公認女性医師となった吟子は同年5月に文京区の本郷三組町で産婦人科荻野医院を開業する。新聞や雑誌は吟子を「女医第一号」として大々的に報道した。荻野医院は繁盛し、翌年に台東区下谷の2階建ての大きな家に移転する。荻野医院には医師の卵や教育者など希望あふれる多くの若き女性たちが寄宿した。

医療に励みながら吟子は本郷教会でキリスト教の洗礼を受ける。キリスト教が男女平等を唱えていることに深く共感した。「女性の地位を認めているのは耶蘇教だけです。耶蘇教を広めることは女性の地位を高めることになるはずです」と日本キリスト教婦人矯風会に加盟し、女性の社会的な地位・権利の向上に情熱を注いだ。

その頃、京都の同志社でキリスト教の洗礼を受けた志方<sup>しかたゆきよし</sup>之善と出会い、すぐに意気投合して再婚を決意する。社会的に広く知られる吟子と無名の年下の青年の結婚に周囲は反対したものの、志方の生まれ故郷の熊本県山鹿市で結婚式を行う。

### 北海道からふたたび東京へ

幸せな結婚生活も東の間、志方はキリスト教に基づく理想郷を北海道でつくるという信念を吟子に伝える。それからまもなく仲間たちと共に瀬棚郡・利別原野の開拓現場へ出発する。彼らは活動の拠点となる今金町を聖書の「神と共にいる」を意味するインマヌエルと名づけた。

東京に残った吟子は明治女学校の校医として同校の寮に移り、知的障害児教育の先駆者となる石井亮一の行動に賛同して荻野医院を子供たちに開放する。1894年6月にインマヌエルに移住し、志方たちの開拓事業を全力で支えた。同時に志方の姉の夫が亡くなったことから娘のトミを預かり、やがて養子にする。

過酷な自然と対峙する開拓事業は遅々として進まず困難を極めた。吟子がインマヌエルに来て3年後、ニシン漁で賑わう瀬棚に移り住む。志方は伝道に専念し、吟子は診療所を開設する。地域の有力者の妻や先進的な女性たちと淑徳婦人会を結成し、慈善活動に精を出す。

同志社に再入学した志方は卒業後、牧師として北海道浦河教会に赴任した。布教活動に精魂を傾けていたものの、大病を患って他界する。墓碑はインマヌエルに建てられた。吟子はその後も瀬棚で診療をつづけた。

ずっと吟子を支えてくれた姉の友子のすすめで3年後に帰京する。墨田区新小梅町で荻野医院を再開し、友子とトミと共に穏やかに暮らした。

5年後に脳溢血で倒れ、62年の波瀾の多い生涯を終える。生前『聖書』のヨハネ伝第15章13節の「人その友のために己の命を捨てる。これより大いなる愛はなし」という一節を愛唱していた。墓所は豊島区の雑司ヶ谷霊園に設けられている。

葬儀は吟子が洗礼を受けた本郷教会で行われた。親戚や友人に加え、吟子を慕い尊敬してやまない若き女性医師たち50余名が見送った。